



変わりゆく「本屋」の概念

なにもしることがないので本屋で立ち読み、そんな「昭和な」光景は少なくなり、いまは「座り読み」に変わった。それも洒落たカウンターや上質なテーブル、椅子まで用意されている。奈良 蔦屋書店もまた客に優しい心配りだが、サービスはそれだけではない。

朝の8:00 から入店しモーニングをここで済まし、購入前や持参した本を23:00までゆっくりたっぷり読むことができるのだから素晴らしい。とはいえ、僕のような年代者はその時間と場所の使い方にきっと戸惑うはずだ…。

僕が本屋に通い始めたのは中学1年から。当時は駅前に中西書店、船津書店があったが、その中でも僕は中西書店が好きだった。

郊外に大型書店もしくはショッピングセンター内に書店コーナーができ、いつの間にかそういう地域の小さな本屋さんが消えていった。

大型の書店ができると、やはりそこに通うようになり、世の中の本が全部ここにおいてあるような気分になって、視野が広まったように感じた。

ネットの時代になると、本は無限にあることがわかった。数学的には有限だが、読む対象の本は無限だとわかった。とてつもない数の本が日々出版されているのだ！

さてかつての本屋は、時代の変遷を経て現代をどう生き抜いているのだろうか？この蔦屋書店に足を踏み入れてみ

ると、本が多い雑貨店 & Cafeといった捉え方ができる。



つまり「本」にあらゆる趣向の角度からアクセスできるというわけだ。なるほどなあ。



同行者が買ったのは、折りたたみの傘

書店のように時代とともにその形を変えていく業体もあれば、頑なに守り続けるものもある。

奈良ホテルの魅力

奈良ホテルがそれだ、このホテルの古さゆえの、頑なさゆえの魅力に惹きつけられて訪れる人は多い。しかし、奈良ホテルとはいえ、時代や社会とともにある。ウィキペディアによると、第二次世界大戦前には国営の時代が長く、近畿において国賓・皇族の宿泊する迎賓館に準ずる施設としての役割をになっていたそうだ。現在は運営を株式会社奈良ホテル、所有者は西日本旅客鉄道となっている。

東京駅駅舎を手がけた辰野金吾と片岡安のコンビが設計を、近畿の建築界において指導的立場にあった河合浩蔵が工事監理をそれぞれ担当するという、建築当時の日本を代表する建築家たちによる万全の体制が敷かれた。建築予定地は当初東大寺南大門東側の計画から現在地へと変節している。建築のモデルとなったのは、宇治平等院だが、奈良の景観に馴染むものかどうか熟慮に熟慮を繰り返した結果だろう。

中に入ると、さすが奈良ホテルの貴賓と歴史の重みを感じずにはいられない。ホテルにせよ旅館にせよ、あるいはカフェであっても、僕が中に入ってまず気になるの

は照明だ。その建物の環境や雰囲気にもマッチしたものかどうかとても気になるが、奈良ホテルはそれが現事に調和している。この照明を見るだけでも十分な価値が僕にはある。

ところで、この照明が転落などで破損するような事態になれば、かなり難儀な修理になるのではないかと心配になるほど、どれをとっても手が込んでいる。私たち宿泊客もこのホテルのすべての備品、設備を大事に使いたいものだ。

サービス面を語ろう。歴史や建物、設備など気品に満ちた重厚さを背景



に、誇りある奈良ホテルの従業員として、自信に満ちた対応をしているように見える。翻って宿泊客はこのホテルに泊まれる喜びを受け取って客室に向かう。

翌日はチェックアウトをした後、平城宮跡の西北に位置する秋篠寺に向った。奈良ホテルの余韻を引きずりながらも、むしろその余韻にマッチした寺であった。国宝の本堂に向かうまでの参道は、見事なまでの苔でおおわれ、日照り続きとはいえ青々としていた。この苔もまた長い時間をかけ、大雨や干ばつに耐えた末の美しさであった。

写真

奈良 蔦屋書店 エントランス/店内2枚
奈良ホテル 階段踊り場/ティーラウンジ
受付横の待合スペース/チェックアウトの様子
窓から差し込む光もレトロ感が漂う

